

キリストの花嫁としての教会

「私たちは喜び楽しみ、神をほめたたえよう。小羊の婚姻の時が来て、花嫁はその用意ができたのだから。花嫁は、光り輝く、きよい麻布の衣を着ることを許された。その麻布とは、聖徒たちの正しい行ないである。」（ヨハネの黙示録 19 章 7-8 節）

六月と言えば、ジューン・ブライド(六月の花嫁)。元々はヨーロッパの言い伝えですが、日本の若者も六月の挙式に多少ともこだわっているのではないのでしょうか。六月に結婚する花嫁は幸せになれる……。その根拠には諸説ありますが、最も有力な説は、ギリシア神話における女性と結婚の守り神ジュノー(Juno)が英語の六月 “June” の語源だからという理由でしょう。また、かなり高い可能性を有する説として、ヨーロッパにおいては六月が最も雨が少なく、結婚式には持って来いの季節だという理由があります。それを考えますと、日本において、天候不順な梅雨の時期である六月の結婚式にこだわるのは、ある意味、滑稽ではないのでしょうか。

ところで、花嫁と言えば、キリストの花嫁。教会はそんなキリストの花嫁にたとえられます。キリストの花嫁としての教会は、まさに花婿としてのキリストに寄り添い、そして、夫婦が一体であるように、キリストと一体になるべきものなのではないのでしょうか。はたして、私たち御茶の水キリストの教会は、そのような意味において、キリストの花嫁になっているのでしょうか。信仰が形骸化してしまい、名ばかりの“キリストの花嫁”になってはいないのでしょうか。花婿であるキリストから気持ちが遠退いてしまっていないのでしょうか。まもなく、私たちは新居、新しい教会堂に移ろうとしています。改めて、花婿であるキリストを見詰め直しましょう。

もうちょっと、やってみよう！—An Extra Mile—

「あなたに一ミリオン行けと強いるような者とは、いっしょに二ミリオン行きなさい。」
(マタイの福音書5章41節)

今年の3月に、アジア各国の“キリストの教会”の青年たちがカンボジアの世界遺産アンコールワットに集まり、当地のストリート・チルドレンに伝道する機会、名付けて“Angkor of Faith(信仰の錨)”[英語では、アンコール(遺跡名)とアンカー(錨)がかかっている]を持ちました。これは数年前に、アジア(タイ、シンガポール等)で働く宣教師や伝道者のリードで始まった、青年を育てるためのワークショップがきっかけで、その実践として毎年行なっている募い働きです。参加者は100名を越え、クリスチャンのみならず、その未信者の友人たちも参加しています。なお、二年前から日本の青年たちも参加しています。御茶の水の青年の皆さんもぜひ、いかがでしょうか？

ところで、今年のテーマは“An Extra Mile”、意識すれば「もうちょっと、やってみよう！」とでもなるでしょうか。これは上掲の聖句からで、強いる者と共にもう一ミリオン(An Extra Mile)行きなさい、というところから来ています。つまり、普段の歩みに加えて、「もうちょっと、やってみよう！」ということではないでしょうか。私たちはともすると、向上や努力よりも、現状維持に安住しやすいものです。しかしながら、そんな私たちに主は、「もう一ミリオン(An Extra Mile)行きなさい」とおっしゃっているのではないのでしょうか。今のままで良しとせず、「もうちょっと、やってみよう！」と。・・・あなたにとって、御茶の水にとって、もうちょっととは？

弟子づくり＝教育＝引き出すこと

「神はこのように、人をご自身のかたちに創造された。神のかたちに彼を創造し、男と女とに創造された。」
(創世記1章27節)

バン・クライバーン国際ピアノコンクールで、見事日本人初の優勝の栄冠に輝いた辻井伸行さん。全盲というハンディを乗り越えての快挙に日本中が感動の渦に巻き込まれました。インタビューに応じて、両親への感謝を語る辻井さん。息子の偉業に「私の息子に生まれてきくれて、ありがとう」と涙ぐむ母親。私自身も深く感動いたしました。

報道によれば、辻井さんは2歳の時、突然、母親が口ずさんでいた「ジングルベル」をおもちゃのピアノで裏で始めたと言います。その時こそ、ピアニスト辻井伸行が誕生した瞬間だったのではないのでしょうか。彼自身の才能もさることながら、それを発見した親の子を見る目にも敬服いたします。

よく言われますように、“教育”を意味する英語の“education”は元来、「引き出す」を意味するラテン語の“educere”から来ているそうです。すなわち、教育とは本来、“詰め込む”ものではなく、“引き出す”ものなのだ、ということではないのでしょうか。今年の教会のテーマでもある「弟子づくり」にも、同様のことが言えるのではないのでしょうか。

「弟子づくり」において最も重要なことは、その人に刻まれている“神のかたち”にこそ、まず目を留めることではないのでしょうか。表面ではなく、その奥深い所に隠された可能性にこそ、目を留め、それを引き出すことが求められているのです。

礼拝者の心得

「そういうわけですから、兄弟たち。私は、神のあわれみのゆえに、あなたがたにお願いします。あなたがたのからだを、神に受け入れられる、聖い、生きた供え物としてささげなさい。それこそ、あなたがたの霊的な礼拝です。」

(ローマ人への手紙 12 章 1 節)

石岡キリストの教会の週報の表紙に、<礼拝者の心得>なるものが掲載されていますので、参考までに引用し、私たちの礼拝への心得といたしましょう。

「礼拝の始まる五分前に着席し、神を待ち望む心で祈りつつ静かに待ちましよう。」
御茶の水の場合は、できれば礼拝前のみことばの学びから出たいものですね。

「できるだけ、前の方から席に着きましよう。」臆することなく主の前に進み出て、積極的な姿勢で礼拝に臨みたいものです。また、後から来る人も配慮して・・・

「新しい方や求道者の横に座り、聖書や賛美歌などのお世話をしましよう。」教会にいらっしゃる方々は、私たちを通して神を見ていると言われます。いい意味でそのことを意識しつつ、愛と配慮をもって、そのような方々に接したいものです。

「献金は、神の恵みに対する感謝の応答であり、神への献身のしるしです。感謝してささげましよう。主は生きておられます。」献金は決して教会への入場料でも、説教に対する聴講料でもありません。それは自発的な“神の恵みに対する感謝の応答”であり、“神への献身のしるし”なのです。ぜひ、喜んでささげましよう。

「帰るときは、お互いにあいさつをして帰りましよう。」聖書の民は、出会った時も別れる時も“シャローム(平安あれ)”と挨拶したのです。さあ、シャローム！

ペバダイン・レクチャーシップの恵みの分かち合い

—アメリカにサドルバック、日本に御茶の水あり—

「そこで、彼のことばを受け入れた者は、バプテスマを受けた。その日、三千人ほどが弟子に加えられた。」
(使徒の働き 2章 41 節)

今回の私のアメリカ滞在は、基本的にペバダイン大学のキャンパスにある学生寮に寝泊りをさせていただきました。太平洋を一望できるロケーションに加えて、野生の鹿の親子が1mの至近距離でも逃げないくらい自然にも恵まれた学生寮は快適でした。そして、レクチャーシップ終了後は、相川忠義兄のご好意で、彼が泊まるロサンゼルス空港に程近い“ホテル・ハシエンダ”(山形勇雄兄のおススメ)に泊まらせていただきました。カリフォルニア・スタイルに感動しつつ、もっと驚いたことは、日曜日に出席したヒルトップ・キリストの教会(グレン&チャーラが属している)の礼拝がそのホテルで行なわれていることでした。一つには、教会が成長し、現在の山の上(=ヒルトップ)の礼拝堂では手狭になっていることもあるそうですが、その一方で、教会は建物ではなく、キリスト者の交わりであることを印象づけるねらいもあるようです。ちなみに、この教会ではセル・グループが盛んです。

ところで、唯一、自由な日となった土曜日、忠義兄にお願いして、注目のサドルバック教会を訪問することができました。オバマ大統領の就任式で祈りを捧げたリック・ウォレン牧師が率仕している教会で、いわゆる“メガ・チャーチ”です。成長しているがゆえに、教会として新しいことがたくさんできているようです。願わくば、御茶の水も、東京のヒルトップに、日本のサドルバックになりたいものです!?

ペパダイン・レクチャーシップの恵みの分かち合い

—キリストの教会にとって 2009 年の持つ意味—

「平和のきずなで結ばれて御霊の一致を熱心に保ちなさい。」

(エペソ人への手紙 4 章 3 節)

今回、多少ともリスクを冒しつつ渡米して得たものは、必ずしも少なくはありませんでした。前回述べましたように、レクチャーシップへの参加やかの地での御茶の水の交わりは言うに及ばず、その他、いくつかの収穫があったのは事実です。その中でも大きな収穫の一つは、今年 2009 年はキリストの教会にとって節目の年であり、特別な年になるかもしれない、ということを知ったことでしょう。

実は今年 2009 年は、現在の「キリストの教会」の歴史的発端とも言えるストーン・キャンベル運動(かつては「聖書復興運動(Restoration Movement)」と呼ばれた)における先駆者の一人トーマス・キャンベルが「宣言と訴告(Declaration and Address)」(1809 年)を世に問うてから 200 周年なのです。もちろん、このことについては渡米前にもある程度は知ってはいましたが、同行した相川忠兄の薦めもあり、レクチャーシップの中でそれに関するクラスをいくつか取れたことは幸いでした。

この運動は、ある意味、聖書にある教会の姿を回復することによって一致しようという運動だったのですが、皮肉なことにその後、最終的には、最も保守的なチャーチ・オブ・クライスト、中間的なクリスチャン・チャーチ、そして、リベラルなディサイプルスdisciplesの三つのグループに分裂してしまうのです。実は今年、そんな三派による合同の主の食卓(“Great Communion”)が世界的に計画されているのです!?

ペパダイン・レクチャーシップの恵みの分かち合い

—アメリカで感じた“御茶の水パワー”—

「恐れなくて、語り続けなさい。黙ってはいけない。わたしがあなたとともにいるのだ。だれもあなたを襲って、危害を加える者はない。この町には、わたしの民がたくさんいるから。」
(使徒の働き 18 章 9～10 節)

御茶の水の兄姉の皆様、ただいま！無事(?)にペパダイン・レクチャーシップから帰ってまいりました。皆様のお祈り、サポートを心より感謝いたします。ところで、私自身無事であり、健康ですが、新型インフルエンザ問題のために、兄姉の皆様にも多大なるご心配、ご迷惑をおかけしていますことを心より詫言ひ申し上げます。念のため、本日は自宅にて家庭礼拝を守っていますことをご了解下さい。

さて、今回、私は「日本伝道の可能性」についてお話をするために渡米したのですが、久しぶりの英語でのスピーチへの不安、新型インフルエンザ問題への戸惑い、さらには、アメリカの兄姉の理解が得られるか否かという大きな心配があったことは、偽らざる事実でした。しかし、神様は上掲のみことばに示されるパウロへの励ましと全く同じように、私に対しても主ご自身が共にいて下さり、また、レクチャーシップが行なわれましたマリブという町にたくさんの“わたしの民”を備えて下さっていることを真に実感させられました。・・・日本から山形兄、相川忠義兄を送って下さり、アメリカには今回全てをアレンジしてくれたグレン&チャーラ・ブラウンご家族をはじめ、ディーン・ピクスラー兄、ジョン&タマエ・マツモト兄姉、ケン&ユウコ・ブラウン兄姉、その他、何人かの兄姉が駆けつけて下さったのです！

日本宣教の可能性

「・・・ひとりのマケドニヤ人が彼の前に立って、『マケドニヤに渡って来て、私
たちを助けて下さい。』と懇願するのであった。」 (使徒の働き 16 章 9 節)

今、私はアメリカはカリフォルニア州マリブにありますがペバダイン大学(いわゆる
“キリストの教会”系列の大学)に来ています。そこで行なわれるレクチャーシ
ップ(修養会)に参加し、小さな発題をするためです。正式なタイトルは“The
Possibility of Mission of the Rising Son in the Nation of the Rising Sun”
 (“陽出づる国”日本における“御子”イエス・キリストの宣教の可能性)ですが、
簡潔に言えば「日本宣教の可能性」というテーマになります。

なぜ、そんな話をしに、わざわざアメリカまで行ったのか、しかも、新型インフ
ルエンザ大流行の危険性が高まる中に行ったのか。そう思われる方もいらっしゃる
かもしれません。しかしながら、ある意味、現在の日本宣教の危機は、百年に一度
とも言われる世界的な金融危機以上に深刻だからなのです。しかも、かつての宣教
大国アメリカは、一部の働き(オルブライト兄弟による“フォーカス・オン・ジャ
パン”やLST)を除いて、多くの関心がより宣教的に効率のいいケニアなどのア
フリカ諸国やウクライナなどの東欧諸国へ向いてしまっているからなのです。

日本は野球の世界大会(ワールド・ベースボール・クラシック)では、連続優勝を
果たしました。しかしながら、世界宣教(ワールド・ミッション)においては、ダン
トツの最下位なのです。プロテスタント宣教 150 年、カトリックは 460 年。しかし、
クリスチャン人口は、全人口のわずか 1%未満なのです。霊的最貧国に福音を！

汝自身を知れ ～ “キリストの教会”とは誰か？～

「キリストの教会はみな、あなたがたによろしくと言っています。」

(ローマ人への手紙 16 章 16 節)

先週、『「キリストの教会」～その歴史と特徴～(Who Are the Churches of Christ?)』(日本橋のみ)というパンフレットをお配りいたしました。昨年、キリストの教会・伝道学院で作成・発行したものです。まさに、その副題「その歴史と特徴」にありますように、私たち“キリストの教会”の歴史的な経緯と主な特徴を簡潔に紹介したものです。ただ、字数と紙幅に制限があり、多少言葉足らずのところもあるかとは思いますので、ぜひ、ご意見・ご質問のある方は、伝道者・野口、あるいは、「キリストの教会」史に詳しい相川忠義兄までお問い合わせ下さい。

一般的に哲人ソクラテスに帰される有名な言葉に「汝自身を知れ」というものがありますが、本当に、自分自身を知る(弁える)ということは、まず第一に必要なことなのではないでしょうか。最近では、“空気を読む”ことだけが重要視され、そうできない人を“KY(=「空気(Kuuki)が読めない(Yomenai)」)”などと揶揄したりします。もちろん、空気(=その場の雰囲気)を読むことも大切でしょうが、それ以前の問題として、自分自身を知ることはいまだ不可欠です。

意外とカトリックやプロテスタントは知っていても、自分たち自身、すなわち、“キリストの教会”について知らない兄弟は多いのではないのでしょうか。この機会にぜひ、私たち自身について調べ、学んでみましょう。なお、新会堂完成の際は、シリーズで“キリストの教会”の学びをすることを計画しています。乞う、ご期待！

霊的柔軟性 ―二択でなく、三択に生きる―

「わが父よ、できますならば、この杯をわたしから過ぎ去らせてください。しかし、わたしの願うようにではなく、あなたのみこころのように、なさってください。」
(マタイの福音書 26 章 39 節)

上掲の聖句は、有名な“ゲツセマネの祈り”の一部です。ここで主は、最初にご自身の率直な願望を述べた後に、「しかし、わたしの願うようにではなく、あなたのみこころのように、なさってください」と付け加えています。ここに、究極の柔軟性があるのではないのでしょうか。

私たちはとすると、祈る際、自らの願望のみを神に押し付けてしまったり、あるいは、祈りに対する答えが期待通りでないと、いじけてしまったりするものではないのでしょうか。願わくば、主イエスのゲツセマネの祈りにある如く、霊的な柔軟性を発揮したいものです。すなわち、最終的には、私たち以上に私たちの最善を知る神のみこころにこそ委ねたいと思います。

最近、ある心理学者が「二択ではなく、三択に生きる」という話をしておりました。すなわち、二択に生きるというのは、物事を正誤、善悪、好嫌等のどちらか一方に決め付けることだと言うのです。このような生き方は、人を疲弊させ、行き詰まらせ、時に、極端へと走らせるのではないのでしょうか。それに対して、三択に生きる。それは、物事を両極端に決め付けることなく、多面的、多様に理解しようとする柔軟な姿勢のことです。このような生き方はある意味、イエスでも、ノーでもない、第三のみこころを発見することにもつながっていくのではないのでしょうか。

ようこそ、御茶の水にある神の家族へ！

「そして、彼らは使徒たちの教えを堅く守り、交わりをし、パンを裂き、祈りをしていた。」
(使徒の働き 2章 42 節)

この春、上京したりして、御茶の水で共に礼拝をしようとしている皆様、ようこそお出で下さいました。心から歓迎いたします。ぜひ、これから共に教会生活を送ってまいりましょう。ちなみに、私たち御茶の水キリストの教会は、次のような教会を目指しています。[6つの教会目録は、週報の表紙に掲げられています]

第一に、ただ人間の居心地の良さだけでなく、何よりも神様にこそ喜ばれる教会。それはまさに聖書に示されている教会の姿です。＜神に喜ばれる聖書的な教会＞

第二に、年齢や性別、民族や国籍を超えて、あらゆる人々が自由に集い、誰もが邪魔されずに心から神様を礼拝できる教会。＜老若男女が集う国際色豊かな教会＞

第三に、御茶の水はまさに東京砂漠、都会の真中にあります。そんな中で、心のオアシス、あなたの故郷になればと思います。＜都会にあるふるさとの教会＞

第四に、まず神様の恵みを覚え、ただそこに留まり続けるのではなく、その恵みに応え「世の光」「地の塩」として出て行く教会。＜恵みに応えて出て行く教会＞

第五に、過去に縛られ、後ろ向き否定的に生きるのではなく、主の愛のうちに前向き肯定的に生き、マイナスにプラスを見る教会。＜前向き肯定的に生きる教会＞

第六に、不況が続く中、殺伐とした世の中。そんな中、私たちは互いにほほえみ合い、ひとを生かし合いたいものです。＜ほほえみ合い他者(ひと)を生かす教会＞
ぜひ、あなたも、こんな教会づくりにご参加下さい。主がお入用なのです！

レッツ・プレイ(祈ろう)！

「何も思い煩わないで、あらゆる場合に、感謝をもってささげる祈りと願いによって、あなたがたの願い事を神に知っていただきなさい。そうすれば、人のすべての考えにまさる神の平安が、あなたがたの心と思いをキリスト・イエスにあって守ってくれます。」
(ピリピ人への手紙4章6～7節)

新年度の御茶の水キリストの教会・教会学校(CS)の年間テーマは、「レッツ・プレイ(祈ろう)！」に決まりました。ちなみに、「レッツ・プレイ」は、試合開始の合図や「遊ぼう」との意味の“Let's play!”ではなく、「祈ろう」という意味での“Let's pray!”です。

よく言われますように、キリスト者、信仰者にとって、“祈りは呼吸”のようなものです。それは自然な営みであると同時に、しないと(靈的に)死んでしまうほど重要なものなのではないでしょうか。けれども、それだけ大事なことでありながら、案外、私たちは祈りについてしっかりと学ぶことをしていないのではないのでしょうか。また、祈りを疎かにしてはいないのでしょうか。その原因の一つとして、祈りは伝道や奉仕などと比べて、直接目に見えないし、ある意味、地味なものに思えてしまうからではないかと思います。

しかしながら、私たちはこのことを知らなければなりません。すなわち、祈りは信仰生活において、必要不可欠な土台であり、<根っこ> だということです。こんな言葉を聞いたことがあります。「上へ上へと伸びない冬は、下へ下へと根っこ張れ」。植物は寒い冬、上に伸びられない分、やがて芽を出す準備として、しっかりと下へ根を張っていくのです。そして、十分根を張れた春、芽を出し、成長し、最終的には、開花・結実を見ることになるのではないのでしょうか。その意味で、祈りは信仰生活の<根っこ> なのです！

アイリッシュ・ブlessing

「主があなたを祝福し、あなたを守られますように。主が御顔をあなたに照らし、あなたを恵まれますように。主が御顔をあなたに向け、あなたに平安を与えられますように。」
(民数記6章24～26節)

上掲のみことばは、一般に“アロンの祝福”と呼ばれるもので、多くの宗派の教会では、いわゆる礼拝を締め括る<祝福>として祈られるものです。背景には、出エジプトしたイスラエルの民が新しい歩みを始めるに当たって受けた激励の祈りがあります。

私たち御茶の水キリストの教会には、この春、進学や就職、転勤や引越しをする方々が例年になく大勢いらっしゃいます。ある意味、そのような方々は新しい歩みを開始することになり、そこには不安も伴うことでしょう。ぜひ、激励の祈りを送りたいと思います。上掲の“アロンの祝福”に加えて、「アイリッシュ・ブlessing(Irish Blessing)」として知られる祈りを送ります。

「あなたがたの前に歩むべき道が常に開かれますように。

まるで風が背中を優しく押してくれるように、

太陽が顔を暖かく照らしてくれるように、

雨が田畑をしとしとと潤してくれるように。

そして、また会う日まで、

慈しみの神が、あなたがたをしっかりとその御手のうちに置き、

あなたがたに平安を下しますように。 アーメン 」

金融危機は宣教好機！?

「ですから、私は、キリストのために、弱さ、侮辱、苦痛、迫害、困難に甘んじています。なぜなら、私が弱いときにこそ、私は強いからです。」

(コリント人への手紙第二 12 章 10 節)

今、世の中には、長引く不況、世界的な金融危機を契機とする、何かとても暗い雰囲気漂っているのではないのでしょうか。そんな暗い雰囲気をなんとか明るくしようと、国は定額給付金を配ったり、ETC使用の高速料金を大幅に値下げする対策等を講じています。しかしながら、本当にそういうもので、世の中が明るくなるのでしょうか。現在の闇は、不況や金融危機が引き金にはなっているかもしれませんが、それはあくまでも、引き金であって、根本的な要因ではないように思います。ゆえに、経済の問題だから経済で、お金の問題だからお金で解決するというのは、あまりにも早計ではないのでしょうか。

今の世の中の闇は、経済やお金の問題という表面的なことよりも、もっと深いところにその根があり、そこにこそ起因しているのではないのでしょうか。それはある意味、究極的には、単なる経済的な不況ではなく、漠然とした人生への恐怖であり、また、金融危機ではなく、むしろ、魂の危機と言ってもいいのではないのでしょうか。つまり、先が見えないという不安なのではないのでしょうか。

今年、プロテスタント教会は、日本宣教 150 周年を迎えるそうです。そんな中、見方を変えれば、長引く不況は布教のチャンス、もっと言えば、現在の金融危機はある意味、絶好の宣教好機にこそなり得るのではないのでしょうか。危機こそチャンス！

あなたにとって、聖書とは？

「聖書はすべて、神の靈感によるもので、教えと戒めと矯正と義の訓練とのために有益です。」
(テモテへの手紙第二 3章 16 節)

最近、イスラエル最高の文学賞である「エルサレム賞」を受賞し、その表彰式のスピーチで勇敢にもイスラエルのガザ空爆を批判した村上春樹氏。そんな村上氏は聖書を「全人類のオープン・テキストである」と評したことがあるそうです。すなわち、聖書には、人として直面するあらゆるテーマが取り扱われている、と。山室軍平の「聖書は鏡なり」という言葉が浮かんできそうです。

ところで、聖書はただ歩むべき方向を指し示す“人生の教科書”(詩篇 119:105)としてだけでなく、何よりも“神の言葉”、“霊的な糧”(マタイの福音書 4:4)として、私たちに必要不可欠なのではないでしょうか。かのヒエロニムスは「聖書を知らないことは、キリストを知らないことだ」とも述べています。

そんな聖書を、はたして私たちは有効に活用しているでしょうか。優れた説教者として有名なスボルジョンは「開かれた聖書は、閉じられている聖書の何倍もの価値がある」と言ったそうです。せっかくの聖書の言葉も、それが私たちに受肉していないならば、それはまさに“絵に描いた餅”になってしまうでしょう。

そうならないために、まず、礼拝だけでなく、聖書の学び(日曜朝、水曜夜等)を大切にしましょう。そして、わずかでも毎日聖書を開いて下さい。聖書は「読むものではなく、聴くもの」(出典不詳)なのですから、日々、自分に語りかけられる使信に耳を傾けましょう。そんな「(朝の)15分があなたを変える」(榎本保郎)のです！

おにぎりは具で決まるように・・・

「私たちは、この宝を、土の器の中に入れているのです。それは、この測り知れない力が神のものであって、私たちから出たものでないことが明らかにされるためです。」
(コリント人への手紙第二 4章 7節)

こんな子供の詩があります。「もし、おにぎりの中の具で / 性格が変わるとしたら / 私の中の具は何だろう」(読売新聞に掲載)。梅、しゃけ、おかか、などなど。確かに、おにぎりは、その具で決まるのではないのでしょうか。中身を問わないで、コンビニでおにぎりを買う人がいるのでしょうか。

私たちキリスト者はある意味、上掲のパウロの言葉にありますように、“土の器”であり、大変もろいものです。しかしながら、そこには“宝”が入るのです。しかも、その宝は「測り知れない力」を持っていると言うではありませんか。

その宝とは一体、何でしょうか。言い方によれば、それは私たちキリスト者に内住して下さる<聖霊>と云えるのではないのでしょうか。「聖霊があなたがたの上に臨まれるとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリアの全土、および地の果てにまで、わたしの証人となります。」(使徒の働き 1章 8節)。主イエス復活・昇天後の弟子たちの力強い働きは、彼らに内住した聖霊の働きでもあったのです。

おにぎりは具でその味が決まりますように、私たちキリスト者もその中に内住する聖霊によって決まると云えるでしょう。そんな聖霊によって、私たちは立たせられ(信仰的自立)、出て行くこと(使命としての宣教)が可能になるからです。

聖霊よ、大志を抱かせよ！

「神は言われる。終わりの日に、わたしの霊を注ぐ。すると、あなたがたの息子や娘は預言し、青年は幻を見、老人は夢を見る。」

(使徒の働き 2章 17 節←ヨエル書 2章 28 節)

過日、某財務金融担当大臣が酒によって失態を演じ、辞任に追い込まれてしまったことは皆さんの記憶に新しいのではないのでしょうか。必要以上に、人に 石を投げる (=さばく)行為は決して容認できるものではありませんが、ただ、酒に酔った勢いで仕事をするのもどうしたものかと思います。

ところで、初代教会では、聖霊降臨(ペンテコステ)の際、弟子たちは酒に酔っているのではないかと誤解されました。弟子たちはガリラヤ出身のユダヤ人でありながら、他国の言葉で語り出したからです。当時、エルサレムにいた国際的な人々はそれを聞き、あっけにとられ、酒に酔っているのではないかと思ひ込んだようです。

そんな中、弟子の一人ペテロが立ち上がり、朝の9時なので酔えるはずのないことを説明しつつ、それこそ旧約聖書の『ヨエル書』から、上掲のみことばを引用しました。ある意味、私たちが聖霊に満たされる時、私たちは主にあるビジョンを見させていただくことができるということなのではないのでしょうか。

まもなく、新しい建物が与えられ、御茶の水キリストの教会の新しいステージ(段階)が始まろうとしています。今こそ、私たちは新たなるビジョンをいただくべき時に来ているのではないのでしょうか。勢いづくために酒の力を借りるのではなく、神の力とそのビジョンにあやかるべく、聖霊にこそ満たされて歩んでいきましょう。

ミSSIONナル・チャーチ

「しかし、聖霊があなたがたの上に臨まれるとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、および地の果てにまで、わたしの証人となります。」
(使徒の働き 1 章 8 節)

「伝道しない教会は、死んだ教会である。」よくそのように言われます。あるいは、「死んだ教会」を描いてくれと頼まれた画家が、ゴシック様式の立派な教会堂を描いた後、その玄関に“伝道献金”と記された献金箱を描き、さらに、そこに蜘蛛の巣を張らせたという話を、私はよくします。すなわち、これもある意味、伝道しない教会は、霊的に死んだ教会であるということではないでしょうか。

しかしながら、そう頭では分かっている、つゝ私たちは肉的に弱く、現状維持のサバイバル・チャーチに墮してしまうものであり、いつのまにか霊的な引きこもり状態に陥ってしまうものなのです。そういう意味では、ここでもやはり、桁外れの罪を赦されたという実感、福音に対する大いなる感動、そして、そこから出てくる熱き救霊の思いというものがとても重要になってくるのではないのでしょうか。

ところで、最近、キリスト教界では“ミSSIONナル・チャーチ(Missional Church)”という言葉が世界的に飛び交うようになりました。これは「伝道的な教会」という意味の造語です。はっきり申しまして、ここには、リック・ウォレン牧師が率仕するサドルバック教会に見られる(と考えられている)ような、ビジネス戦略的な教会形成に対する反省があるのです。つまり、教会はただ自ら成長・拡大する以上に、“伝道”という使命を果たすべきではないか、ということなのです。

～しない“愛”

「それで、何事でも、自分にしてもらいたいことは、ほかの人にもそのようにしなさい。これが律法であり預言者です。」
(マタイの福音7章12節)

上掲のみことばは、主イエスの山上の説教の一節であり、“黄金律”とも呼ばれる有名な箇所です。ちなみに、後半の「律法であり預言者」とは、ユダヤ的な表現で、旧約聖書を指す言葉です。つまり、この言葉(=黄金律)にこそ、(旧約)聖書の真髓が語られているということではないでしょうか。

ところで、この主イエスの“黄金律”に似て非なる言葉に、通称“銀の教訓”と呼ばれる言葉があります。例えば、論語に出てくる「己の欲せざることを人に施すなかれ」がその好例でしょう。すなわち、自分にしてもらいたくないことは他の人にもしてはいけない、という類の教えです。

両者はよく似ていますが、一つの違いは、後者すなわち“銀の教訓”が「～しない」という消極的な態度でも実践可能であるのに対して、前者すなわち“黄金律”は「～する」という積極的な姿勢が必要不可欠であるということではないでしょうか。つまり、“黄金律”の方が実践困難であり、ゆえに、それを為し得た際には、銀に勝る黄金の充実感が与えられるのです。これ、まさに、“与える愛”です。

しかし、よく考えてみて下さい。時と場合によっては、敢えて「～しない」という“与える愛”があり得るのではないのでしょうか。一見、消極的な“黄金律”があるのではないのでしょうか。例えば、ヨハネの福音書8章(1～11節)に出てくる「姦淫の場で捕えられた女」に対する主イエスの姿勢はその典型ではないかと思います。

恵みの奥義 —安価な恵みから高価な恵みへ—

「あなたがたが救われたのは、ただ恵みによるのです。」

(エペソ人への手紙2章5節)

牧師にして神学者であったディートリッヒ・ボンヘッファーは、受けるだけの恵みを「安価な恵み」と批判しました。その意味では、教会は決して、恵みの安売りをしてはならないでしょうし、私たちクリスチャンはそれぞれ恵みへの応答が求められているのではないのでしょうか。主イエス・キリストの十字架の贖いを通して与えられる救いの恵み。私たちはこれをただ受けるだけでなく、受けた者の応答として、さらにそれを他者と分かち合う必要があるのです。このことがある意味、「高価な恵み」なのであり、また、恵みの奥義とも言うべきものなのではないのでしょうか。そして、さらに言えば、それこそが宣教(伝道)ということに他なりません。

先週の『今日の力』(日本語版)の火曜日のメッセージ[マーク・A・ヤング兄(村越克子姉訳)]には、まさに、そのことが分かりやすく説明されておりました。以下、直接引用します。「孫の一人が、私に会う度にガムを持っていないかとねだります。今日もおそらくおねだりしてくるだろうなという時には、ポケットにいくつかガムを持っていることにしました。そして、孫に「お兄ちゃんにあげる分も持ってる？」と聞かれたら、喜んでもう1つ渡します。孫はガムを2個ちょうだいということを学びました。1つを自分の口の中に入れ、もう1つを兄にあげるために駆け出していきます。このことは、孫が恵みの奥義を学んだということではないのでしょうか？」本当にそうだと思います。ぜひ、私たちも恵みの奥義にこそ、生きましょう！

クリスチャンの危機管理 ―ハドソン川の奇跡に学ぶ―

「神はわれらの避け所、また力。苦しむとき、そこにある助け。」(詩篇 46 篇 1 節)

去る 1/15 の午後(日本時間では 16 日早朝)、離陸直後の U S エアウェイズの(アメリカ)国内線旅客機が、鳥の群れをエンジンに吸い込んでしまったトラブルが原因で、飛行不能に陥り、ニューヨークのハドソン川に不時着しました。乗客・乗員計 155 人は全員救助され、奇跡的に、死者・行方不明者は出ませんでした。マスコミは一斉に、空軍出身のベテラン機長の熟練した操縦技術と冷静沈着で的確な判断が大惨事を防ぎ、ハドソン川の奇跡を導いたと称えています。ちなみに、機長はアメリカの英雄として、新大統領の就任式にも招かれておりました。

おそらく機長はあらゆる場面を想定して、日頃から危機管理を徹底していたのではないのでしょうか。ゆえに、あのようなパニックに陥っても、適切な判断ができたのだと思います。また、大都会ニューヨークの真中にありながら、そこに川幅の広いハドソン川が横たわっていたことも、まさに不幸中の幸いだったと言えましょう。ところで、私たちクリスチャンもある意味、いざという時のために日頃から危機管理を徹底しておきたいと思います。少なくとも、どのような危機的な状態に陥ろうとも、そこには必ず、奇跡のハドソン川ならぬ、試練の中にも同伴される神がおられるのです。まさに、そんな神は「われらの避け所、また力。苦しむとき、そこにある助け。」なのです。その守備範囲の広さは、ハドソン川の川幅どころではありません。信じられない挫折を味わった時、悲しい別れを経験した時、思いも寄らぬ病気になった時、そこに神はいて下さり、私たちの着水を待っているのです。

歴史(History)は神の物語(His Story)

「聞きなさい。イスラエル。主は私たちの神。主はただひとりである。」

(申命記6章4節)

太平洋を隔てたアメリカ合衆国では先週、初のアフリカ系アメリカ人大統領が誕生いたしました。時差の関係で、日本時間の真夜中に行なわれた大統領就任式を眠い目を擦りつつテレビで観たのは、はたして私だけでしょうか。バラク・オバマ大統領の就任演説もさることながら、最も印象に残りましたのは、就任式での熱い祈禱でした。これまで、九代続けて大統領就任式で祈りを導いてきたピリー・グラハム牧師に代わって、今回は今後のアメリカ・キリスト教界のリーダーと目されるリック・ウォレン牧師(『健康な教会へのかぎ』、『人生を導く5つの目的』の著者であり、教会員二万人を数えるサドルバック教会の牧師)がその祈りを導いたのです。ちなみに、オバマ大統領は民主党ということもあり、保守的な立場のウォレン牧師を採用したことに反発したりベラルな人々も少なくなかったようです。

祈りの概要は次の通りです。まず、歴史(History)は、神の御手のうちにあるまさに神の物語(His Story)であることを告白し、唯一の神を讃美すべく上掲のみことばを引用。そして、オバマ大統領に、謙虚に国民を導く知恵(Wisdom)、誠実に国民を導く勇気(Courage)、そして、寛大に国民を導く慈愛(Compassion)を与え給えたまえと求めました。さらに、ウォレン牧師はオバマ大統領の祝福のみならず、彼を支える妻、二人の娘たちのためにも祈っています。そうして、最後をいわゆる“主の祈り”(参考: マタイの福音書6:9-13)で結んだのでした。祈りで始められる恵み！

夢を見るのは子供、夢へと動き出すのが大人

「みことばを実行する人になりなさい。自分を欺いて、ただ聞くだけの者であってはいけません。みことばを聞いても行なわない人がいるなら、その人は自分の顔を鏡で見る人のようです。」
(ヤコブの手紙1章22～23節)

いよいよアメリカでは今週、初のアフリカ系アメリカ人大統領の誕生です。ある意味、これは公民権運動の父、M. L. キング牧師が「私には夢がある(I have a dream.)」と演説した、そんな夢の一部の実現なのではないでしょうか。

その意味では、まさに「求めよ、そうすれば与えられる」のであり、夢を思い描くことは極めて大切なことでしょう。しかしながら、実は、夢は見るだけではダメなのです。つい先日の“成人の日”の朝日新聞「天声人語」欄に次のような言葉が紹介されていました。「夢を見るのは子供、夢へと動き出すのが大人」。

確かに、私たちは子供のようになって、夢を見、大志を抱き、大きくビジョンを思い描くことから始めなければなりません。しかしながら、いつまでも、そこに留まっていたら、夢は夢のままであり、決して実現することはないのです。まさに、私たちは大人の(成熟した)キリスト者として、具体的に、夢の実現へと動き出すところこそが求められているのではないのでしょうか。

ただ夢を見続けるだけでなく、思い描いた夢の実現に向けて、具体的な第一歩を踏み出していきましょう。そして、そんな第一歩を踏み出せた時、それが本当の意味で、キリスト者としての“成人”を迎えたことになるのではないのでしょうか。今年こそ、ぜひ、キリスト者として“成人”いたしましょう！

主に対して接するように…

「まことに、あなたがたに告げます。あなたがたが、これらのわたしの兄弟たち、しかも最も小さい者たちのひとりにしたのは、わたしにしたのです。」

(マタイの福音書 25 章 40 節)

かのマザー・テレサは「飢える子は飢えるキリスト、病める子は病めるキリスト」をモットーに、貧困や飢え、病氣や差別の中にある“いと小さき人々”に寄り添い、愛や具体的な助けの手を差し伸べていきました。彼女は本当に、そのような人々に対して、主イエス・キリストに対して接するように接していったのです。

いよいよ明日、私たちは待ちに待ったチルドレンズ・ホームのおともだちを迎えます。お分かりのことと思いますが、これは単なる慈善活動ではありません。広い意味では、これはまさに宣教であり、証しの時と言えるでしょう。私たちがキリストの香りを放つことによって、彼らに神の愛を少しでも感じてもらえたらと思います。また、できれば、主イエス・キリストと出会うきっかけが与えられればとも思っています。ただ、実際は多くの場合、私たちの方がかえって励まされ、おともだちから生きるエネルギーをいただくことになるのですが…。

ぜひ、私たちは今回、おともだち一人一人に対して、主イエス・キリストに対して接するように接しようではありませんか。そうすることによって、私たちはおともだちを愛すると同時に主をも愛することになるのです。そして、それをこそ、主は最も望んでおられるのではないのでしょうか。「目に見える兄弟を愛していない者に、目に見えない神を愛することはできません。」(ヨハネの手紙第一 4:20b)。

弟子づくり

「それゆえ、あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子とせよ。そして、父、子、聖霊の御名によってバプテスマを授け、また、わたしがあなたがたに命じておいたすべてのことを守るように、彼らを教えなさい。見よ。わたしは世の終わりまで、いつも、あなたがたとともにいます。」（マタイの福音書 28 章 19～20 節）

人間に対する神の最初の命令は「生めよ。ふえよ。地を満たせ。」（創世記 1 章 28 節）でした。これは言わば、子孫繁栄命令です。そして、それと対をなすかのように、主イエス・キリストの最後の命令が、上掲のいわゆる大宣教命令なのです。

一般的に、この命令は「大宣教」命令と呼ばれ、伝道に出て行くことのみが強調されがちですが、実際には「弟子とせよ」という言葉や「教えなさい」という言葉が示すように、弟子づくり/訓練や学びという牧会の働きが含まれているのです。昨今の宣教学の検証によれば、戦後欧米の宣教師による日本伝道における一つの反省点は、当時、伝道熱に後押しされて、大勢の伝道エキスパートは派遣されても、その後の日本人教会やクリスチャンを育て、自立させようとする教会エキスパートが十分派遣されなかったことにあると考えられています。

飢えている人にただ魚を与えるだけでは、やがて、その人は再び、飢えという問題に直面することになります。しかし、その人に寄り添い、多少時間をかけても魚釣りを教えれば、その人はやがて完全に自立していくのではないのでしょうか。いわゆる弟子づくりも同じで、ただ、霊的に飢え渴いている人に福音を提供するだけでなく、その人がキリストの弟子となるように訓練することが求められているのです。